



第763号
 発行人 ● 豊丘村公民館
 館長 市澤和宏
 編集人 ● 長野県下伊那郡
 豊丘村公民館報
 編集委員会
 0265-35-9066
 印刷所 ● 龍共印刷株式会社

私たちの村
 (9月1日現在 ※外国人を含む)
 男 3,252人
 女 3,263人
 総人口 6,515人
 世帯数 2,253戸

爽やかな秋の始まり(堀越西部)

史学会と公民館が共催し、八月十一日にゆめあるて大ホールで歴史講演会が開かれた。今回は平和学習の環境として、講師に豊丘村出身で、現在東京理科大学大学院修士課程二年の大橋遼太郎さん(二十四)を招いた。大橋さんの母親晴美さんは昭和五十三年十二月に、両親兄弟六人で中国から永住帰国された城の宮下英夫さんの長女。宮下家は、英夫さんの父、正司さんが、満蒙開拓(旧五道崗開拓団)に参加するため田村から中国に渡った。

講演会場のゆめあるて大ホールには、およそ五十人が訪れ、中には祖父の宮下英夫・玉江さんの姿もあった。平成十九年から二十二年にかけての約三年間、母親晴美さんの留学により一緒に北京に渡り、中国の小学校で学んだ体験をまとめた著書『七歳の僕の留学体験記』をもとに、『七歳の少年が体験した中国』と題した講演と平和と」と題した講演

豊丘史学会
 阿部 繁
 講演会場のゆめあるて大ホールには、およそ五十人が訪れ、中には祖父の宮下英夫・玉江さんの姿もあった。平成十九年から二十二年にかけての約三年間、母親晴美さんの留学により一緒に北京に渡り、中国の小学校で学んだ体験をまとめた著書『七歳の僕の留学体験記』をもとに、『七歳の少年が体験した中国』と題した講演と平和と」と題した講演



冒頭、大橋さんは、日中両国民の相手国に対する印象が良くないのは非常に残念とし、生の中国を体験してきた僕が、本当の中国を知ってもらえるよう話してみたいと中国での小学校生活を紹介した。

教科書には、進軍して来た日本軍に、十三歳の少年が、村への案内を頼まれたが、危険を察し、村へ案内せず袋小路に誘導した。この行動により、少年は軍により殺されてしまった、と教師により朗読された。教室の空気が一変し、僕は鈍器のようなもので頭を思いっきり殴られたような気がした。心が痛い。四十分の授業がこんなに長く感じたのは初めてだった。授業終了のチャイムが鳴ったが僕は動けなかった。もう

僕が生まれる前の戦争が憎いが、戦争を無かったことにすることもできない。「僕は何をすべきなんだろう」と、この時から頭の中で追いかけていた。講演からは、互いを知ること、築いた級友との友情、信頼関係が、平和へと繋がるのが解る。今後の大橋さんのご活躍に期待するものです。(宮下正弘)

史学会・公民館共催歴史講演会 「七歳の少年が体験した中国」 ～戦争と友情と平和～

豊丘村公民館学習会 ・豊丘村共同開催

空き家セミナー

～空き家と近い将来空き家になるであろう住宅について考えましょう～

近頃、様々なメディアで見聞きする機会が増えた空き家問題。豊丘村内でもご多分に漏れず多くの空き家が存在することから、専門家による空き家セミナーをお盆の帰省に合わせ八月十二日の休日に開催。村内外から約四十人に参加いただいた。

建設環境課 環境係長
 代田 博

セミナーでは、まず産業振興課移住定住係から、村内には約二百軒の空き家が存在し、利用されているものとして、利用されていない空き家があり、タイプは様々といった現状説明がされました。飯伊空き家バンク委員会の片桐巨巳宅地建物取引士からは空き家対策への取り組み

等について、空き家情報バンクの仕組みや登録までの流れ、片付けで悩む場面が多い仏壇や遺影等への対応方法など幅広く講演いただきました。特に断捨離の中で説明のあった家や家財の片付けは、自分の人生を片付けるということ。親子であっても、人生(家)の片付けを強要すれば口論となること、このことは行政として相談を受ける際も同様に、肝に銘じて置かなければいけないと感じました。

次に村内在住で事務所を開設している、大澤智秋司法書士から、今年の四月から義務化された相続登記について講演いただき、元旦に発生した能登の大地震を事例に挙げ、相続登記がさ

最後に事前予約制とした「空き家なんでも無料相談会」には、村内または県内外から八組の方の申し込みがあり、空き家の有効活用や解体、相続登記など具体的な案件について、熱心に相談されていました。時間も超過し、セミナーは好評のうちを終了となりました。

村では空き家バンクや補助事業など様々な空き家対策に取り組んでいます。空き家に関するお悩みがありましたら、産業振興課移住定住係または建設環境課環境係までお問い合わせください。

段立

今年の夏も非常に暑い夏となった。連日三十五度を中心に蒸し暑い日が続いているが、自分の少年の頃を思い出してみよう。暑い夏に暑かったのだろうか。テレビコマーシャルでかすかな記憶にあるが白地の和服姿の女性が、お中元を抱え日傘をさして歩く真夏の路、いかにも涼しそうに見ていた記憶がある。それほど昭和四十年代は猛暑と言えよう。暑さではなかったのではないだろうか。高等学校時代の唯一の友人に山形県在住の大切な友がいる。山形県といえば長らく暑さ四十八度(昭和八年)を記録した山形市が、最近まで暑さの記録を持っていたが、最近この記録はいとも簡単に塗り替えられたとのこと。それほど最近の暑さは異常としか言えないのだ。さらに最近の豪雨がある。盆を中心に一瞬のうちに雨が降り出し、バケツの水をひっくり返したとはこのことで、最初はポツポツが瞬間に土砂降りとなり、慌てて車に逃げ込んだりもすっかり濡れしてしまうほど短時間で降り始める。これが近頃話に聞くゲリラ豪雨なのだろうか。台風もいつとも違う進路をとり東北方面への上陸となっており、友人の地域も浸水被害は相当なものだったと話してくれた。しかし豊丘村にはありません。秋の特産松茸があり、心ならずも期待を失ってしまう、愚かな自分があるのだった。

公民館報『とよおか』 五大ニュースをさかのぼる

(八) 昭和48年

この年は老人福祉や医療、農業、山間地の開発に関する話題が関心を集めた。

1	老人憩いの家完成へ	175票
2	診療所医師確保に悩む	100票
3	投票になった農業委員選挙	87票
4	畑総で変わる中段地帯	84票
5	長沢別荘分譲始まる	80票

①「福祉」という言葉がクローズアップされ始めた時代。村では高齢化社会を見据え、議員の発議で「老人憩いの家」設置が決まった。候補地には滝川公園、田村北村地籍、林公園、伴野藤ヶ城、壬生沢場知沢などが争ったが、最終的に河野泉龍院上の大林田湧水の水質が硫黄鉱泉であるということと現在の場所が決まった。

②1年以上医師が不在だった村宮河野診療所。高松病院から週2回、医師が出張診療をしていたが、常勤の医師確保が必要だった。国

③戦後、各市町村にできた農業委員会。2016年までは農業委員は公選制だった。実際には地区推薦により無投票で決まっていたが、この年は定数15名に16名が立候補し十数年ぶりで選挙に。

④小渋川総合開発計画により畑地総合改良事業が始まった。中段の三次原、田村原、林原、伴野原などで組合ができ、小渋川の水利用による農地の開発が盛んになった。伊那谷特産のリンゴ、ナシ、柿などの生産に本腰。

⑤不動産会社によって長沢地区に造成された別荘団地は「天竜グリーンヒル」と名付けられ分譲が始まったが、この年の石油危機やインフレによって売れ行きが伸び悩む。その後、別荘地は村が買い戻した。村内にはほかに同様の開発の話があったが、村民の中には「静かな村が荒らされていくのは悲しい。開発は長沢だけでたくさん」との声も。

★この年の出来事

石油危機で(省エネ)の語はやる/振り替え休日実施/ゴルフブームでゴルフ場の造成さかん

★この年のヒット曲

『学生街の喫茶店』ガロ/『喝采』ちあきなおみ/『危険な二人』沢田研二
監修:筒井 芳夫さん
吉川 達郎さん
文責:壬生 雅穂

中央フリーウェイ 右に見える競馬場左はビール工場。松任谷(荒井)由実(愛称「ユーミン」)の「中央フリーウェイ」の一節である。中央自動車道を八王子に向かって進むと、調布ICと国立府中ICとの間に東京競馬場とサントリーの武蔵野ビール工場がある。デートの車からの風景が綴られているのだ。

と家族の安寧を恣にしに繰り返し折った。その甲斐あつてか、神のご加護か、頻りに帰省していたが、一度も事故を起こさず、巻き込まれてもいない。高速度道路では警察の厄介になつたこともない。ただ怖い思いをしたことは何度かある。

のめくれた部分を補修しただけで事無きを得た。路肩に二・三台停車していたのを思い返すと背筋が寒くなった。

歌は世につれ〜 三十六話

ドライブデートの定番曲『中央フリーウェイ』

上佐原 小池 光好

怖い思いと言え、おあり運転。注視していても気が付けばすぐ後ろにピツタリとくっ付く車。嫌がらせのように幅寄せしてくるトラック。ドラレコが無い時代、ただただ恐怖に怯えやり過ぎた。

先に行った「初めてのドライブデートでかけたい一曲」の調査で『中央フリーウェイ』が一位に輝いたと



『フットとえんぴつを送ろう』ある大手薬品会社の営業マン、都庁勤務の公務員、看護師。彼らはいまの仕事を決めることになっても、旅費は自費負担であつても仲間は集まってくる。

中学生ボランティア活動の現状

豊丘村公民館長 市澤和宏

公民館で行っている活動で住民の皆さまに知っていただく必要性を感じる活動をご紹介します。

ア活動など社会奉仕体験活動の充実をめぐる事とされています(昭和二十二年)。平成十七年七月には社会教育法と併せ一部改正され、教育委員会の事務として青少年に対する体験活動の機会を提供する事業の実施及びその奨励に関する活動を規定しています。これは学校教育と社会教育とが相まって体験活動を促進する趣旨であるとされています。

この中学生ボランティア活動は中学生が地域社会に飛び出し地域貢献活動の一貫としてボランティア活動に参加し様々な場面で社会活動を経験する事で自己有用感の高揚、将来社会人になる時の一つの参考になればと願うものなのです。

公民館が生徒の受入企業・団体・事業などの求人をもとめ中学校へ求人票をお届けし、生徒自身の意思で参加する活動です。以前は夏休み・年末年始・春休みなど長期の休み期間での求人でしたが今は休み期間以外での募集など、大人と同様に土日・平日の夜の会議の

求人も増えてきました。また本年は生徒の自己表現に通じるCATV番組製作・出演も始まりました。この活動は当たり前ですが中学生がいらないご家庭では認知されない事業なので、本年の現状を報告させていただきます。

夢みた遠か地平線

『海外協力』なんて、私たちがボランティアでできるのだろうか? 北市場 福澤郁文

なぜ過酷な地であると想像できるのに、生活を変えてまで、貧困の国で働いてみたいと考えるのか?不思議である。

人が集まってくるとおもしろくなる。詩聖タゴールの詩の朗読会や、バ独立戦争を記録した映画会の開催など、『バングラデシュの夕べ』と称してイベントを組めるようになっていった。その場所へもまた新たな同志たちが集うようになる。

探し出すのかもしれない。それに日本人自身も、ベンガル語を習得すること。馴染みのない食事に慣れること。日本の会社組織で命じられたことのみをこなしてきた経歴だけでは、この国で自律的には生きていかれないということ、思い知らされる結果になったのだ。

毎週日曜日「バングラデシュの子どものために教育を」街頭募金活動を行なうなかで生まれた成果はなんだったのだろうか? 『街頭募金で集まる資金はわずかだった』『日雇い労働者で稼いだほうが金になる』なんて意見もでてくる。資金は集まらなくとも、多くの人たちからの『なぜこんなことやってるの?』『バングラデシュってどんな国なの?』その疑問に答えていくうちに、やがては手応えを感じられるようになるのだ。

それは他人ではなく、自分自身に向けての確信のようなもの:『国際協力を、民間のちからで築いていくことができる』という夢が、現実の活動に実現していくかもしれないということがおきるのだ。『私も今の仕事をやめてバングラデシュへ行きたい』『子どもたちの夢を助けてあげたい』『人生にチャレンジしてみたい』という人が少しずつ現われてきたのだ。毎週の木曜日に開く会議にも、ひとり二人と顔を出し参加してきた。

『ポイラ村での私たちの失敗』若者は夢と希望を抱いてバングラデシュに渡っていった。『子どもたちの教育の場をつくる』現実のプログラムとして、慣れない農村で活動をつくりあげていくことは、至難の努力と、現地の協力者なしには生み出すことができない。日本でも継続的な資金を、どのように集めるのか難題であった。貧しい村人たちにとってみれば、日本からきた若者たちに過大な期待を寄せることにもなる。私たちの計画はいくつもの壁に突き当たり、失敗をする結果になった。

村人たちが教育の重要性にめざめ、資金を出し学校を建設する、そんな期待は実際には夢物語でもあったのだ。最初のモデル農村としてポイラ村が選ばれた。『総合的な農村地域開発』のモデル地域を創り出そうと、我々は考えていた。しかし、農民たちが教育を受けていない。学校を知らない。読み書きすらおぼろげな気が付けるのか?。教育関係者を

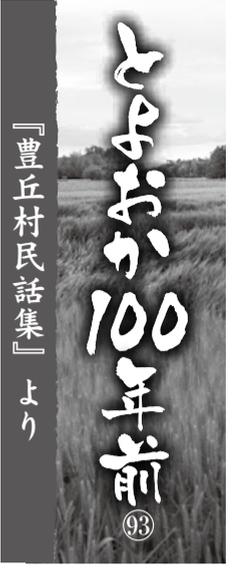
村人のための教育プロジェクト 教育がなぜ大切であるのか。読み書きのできない農民たちにその重要性を伝えることはそう簡単ではない。しかし、女性たちが現金収入を得られる手工芸品の制作は理解がすすみ、『女性のための手工芸品生産組合』の活動は軌道に乗りはじめた。

強盗集団に教われ、二人の駐在員が重傷を負ってしまふ大きな事件が起きたのであ

女性たちを対象にした手工芸品プロジェクトの指導がはじまる



女性たちを対象にした手工芸品プロジェクトの指導がはじまる



『豊丘村民話集』より

六十一年の子供のおや生活(三) 史学会後共栄班

私たちが史学会後共栄班では、一夕集いの席で、私たちの少年のころ、大正初期前後のおやつ生活のことに及んだときに、現代との差のあまりにも大きいのに驚くとともに、これから先の四十年、つまり百年経った時の差はどうかと、これからの世代の人に顧みてもらおうと記録を書いておこうと話し合ったのがこの一文であります。

主食の米にしても今のような電気精米機(これは大正七、八年ころ、阿島と座光寺へ一台宛できた)で真白く搗いた白米ではない。六人くらい宛の仲間の水車小屋で搗いた米糠のよくとれない米糠色と臭いの強い半白米といったくらいのものであった。

こちら資料館(246) 村内三つの橋の架橋

初めに、七月のこの欄で「釣越」について書いたが、明治三八年に竣工してまもなく死亡事故が起きて、以後自然と使われなくなったと記した。しかし、河野秀男氏の日記を読む中で明治四一年八月の帰省と上京の際に「釣越」を使ったとの記述があり、当時まだ「釣越」が使われていたことが判明した。ここに、前述を訂正し御詫びいたします。

さて、現在、豊丘村と対岸を結んでいる三つの橋(明神橋・万年橋・台城橋)が架かるのは明治四一年以後のことである。

副食も野菜入りの汁と野菜の漬物が多くて、豆腐が入ればお彼岸やお祭。佃煮や小魚はよくありましたが、魚と名付けるようなものは五、六日に一回くらい。中にはお三日といって月三回のお魚日を固く守っていた家庭もあったと言います。

肉類に至っては鹿肉か馬肉が年幾回か。豚や牛はほとんど飼育されておりませんので、一般家庭へは出回りがありません。一年中肉類を食膳へ乗せない家庭の方が多かったと思います。

主食がこんな状態です。は想像もできぬものばかりでした。まず私たちが盛んに食べたのが、今は食べないと思う天然のもので、春のスイコの棒、イタドリ等の塩漬け、チガヤの幼穂、楓の葉、ヒヨコ草、山草刈の大人が上荷にさしてきてくれたスイバ。少し経つと桑の実や桜の実、口も糞も紫色にして食べましたが魯桑系の実がまずくて山桑系の桑の実が美味でした。酸

一番初めにできたのは、どうも台城橋のようだ。釣越が危険極まりないため、架橋の希望は早くからあった。村誌には竣工の年が明確に記されていないが、日下部新一氏の「天竜川の橋」によると明治四一年に吊橋が完成したとある。同年の八月には冒頭に記したように河野秀男氏が釣越を使って川を越えているので、当然それ以後といえる。

次にできたのは、万年橋である。明治四〇年着工、竣工は四二年四月であった。台城橋と同じく木製の吊り橋である。橋が永久に保つようにとの願いを込めて「万年橋」と名づけたが、

煮、堤防の石垣の穴ごと探して歩いて取った蜂の子、雨上がりに桑畑で取ったきくらげ。これらは珍味のうちでした。

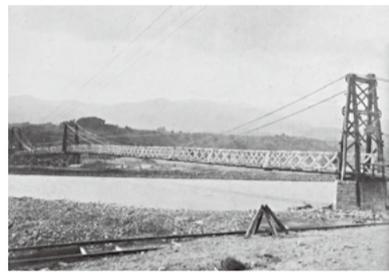
スモモ、巴巨杏、小さい甘柿の良、ニタリ、これらは今では見ることもできません。

(続く)

ゆすら、黒ゆすら、なつめ、黒い小柿、熟した梅、胡瓜等は塩を片手に道々食べて歩きました。今では作るだけで警察に呼ばれる鬼げしの実、サワガニの醤油

一〇年程後の大正八年に落成してしまっ。翌九年一二月に再建されたが、更に昭和四年に架け替えが行われ、昭和三四年現在の鉄橋になるまで使われた。

最後に完成したのが明神橋である。明治四一年十月着工。翌四十二年十月竣工である。総全長二五間(約二二五m)、幅七尺五寸(約二・三m)石造り橋脚二か所、石積橋台二か所、木造塔三か所による木造吊り橋である(写真)。総工費一万八千円余はほとんどが片桐良弥



(資料館主任 唐澤武彦)

猛打爆発!? テニス体験会開催

豊丘テニスクラブでは、八月四日(日)の午前中、林原コートにおいて、テニス&ソフトテニス体験会を開催しました。様々なスポーツを体験出来る機会を設ける事を目的に掲げ、手始めにテニスクラブが体験会を企画しました。当日は、小学生三名とその保護者に参加

頂き、細かい事は気にせず、ともかくボールを打ってみよう」をスローガンに行いました。離れたところから出されたボールを打つ事に苦戦しつつも、子どもも大人も笑い合ひ、褒め合ひ、時には悔しがり、短い時間で企画したのが、短時間で生三名とその保護者に参加



理事者 筒井伸治

俳句 短歌

迎火や孫らに夫は祖を語り
近寄れば沢蟹こぶし振り上げむ
峡谷に山百合楚楚と香ばしりぬ
雪溪を女の足のたくましく
塗りたての光眩しき雨蛙
短冊をはみだす願ひ星祭
処暑の風身仕度さきり演奏会
天竜鯉炎暑の闇を浮きたり

片桐 洋子
森田 恵子
木下 眞水
松岡 照子
宮下 純子
林 恵美子
丸山 時子
矢島千勢子

図書館だより 9月号

お楽しみ会のご案内
図書館では、十月のお楽しみ会を開催いたします。
日時：十月二十日(日)
午前十時三十分～
場所：ゆめあて
研修室一・二
出演：おはなしくらぶ
おおきな木

内容：絵本、紙芝居、手あそび、などなど、楽しいことがいっぱい♪
どうぞ皆さんお越しください。

移動図書のご案内
十月の移動図書
一日(火) 伴野勤労者福祉センター
四日(金) 壬生沢福島集落拠点施設
時間 午後八時～九時

本の紹介
『ミュージアムグッズのチカラ』
大島 夏美(著)
国書刊行会
博物館ならではの独創的でユニークなグッズ(四十九館分)が写真とともに紹介されています。作り手の想いやこだわり、印象的な裏話をすると、さらにグッズに興味がいってきます。楽しくて面白い、珍しいグッズを見つけたら、お目当ての博物館に行きたくなりますよ。

柳

〈豊丘村川柳クラブ豊柳会〉

▼課題「育」 福沢勝美 選
おいしいよ育てた苦勞報われる 林 もも子
平穏な地域に育つありがたさ 西元 峯子
底辺を育てた結果金メダル 市沢 照子
軸吟：選ぶなら氏より育ちと人は言い 福澤 亀人

▼課題「使」 互選
捨て切れぬ使い馴れたる古道具 福沢 勝美
断捨離はすべて捨てない使い分け 小澤 凜
手間不足使い捨てた付け回り 山本 義彦
▼自由吟 山本義彦 選
パリ五輪金二十個に感動す 安田 喜子
五輪湧く裏で攻撃痛ましい 原 美風
軸吟：さみだれを超えて氾濫最上川

きざはしに男の子と夏夕焼
山寺へ続く参道山紫陽花
新涼の爪を長めに切にけり
梅雨の闇卒寿の命拾ひあぐ

池田 美和
細井 恵子
吉川 明子
北原 昭子

「足の裏はあちゃん探んで」と四年生いつしか吾を抜き二十三センチ
大國や日本の政治激動中「鉄腕アトム」のごときヒーロー出でぬか
ラジオより殺傷事件日毎聴く何故荒ぶ今の人心

筒井 恵子
壬生 千春
松尾ヒサコ

今日も雨畑の様子が気になりて傘に長靴じゃが芋畑に
年頃か無口になりて男の孫は中学三年にきびできおき
雨上がり夕焼雲は赤く映え高速バス停に妻を迎える
九十六路如何に過ごすか自問すれど明日の風に任す他なし
存へば浮かぶ友がき皆若く呼べど答へぬ者多くなり

大原真由美
福澤 郁文
毛涯百合子

